



篠田 節子

しのだ・せつこ 作家。1955年生まれ。東京学芸大卒。著書に「女たちのジハード」(直木賞)「田舎のボルシェ」など多数。

収納力だけは十分なはずの本棚の枠板が外れた。別の本棚では棚板が落ちた。本の隙間に新たな本を無理矢理詰め込み、さらに天板との隙間に寝かして押し込んであるのだから、安物の本棚の木タボが折れたりネジが飛んだりも当然だ。

ペーパーレス

てどこかで読んだ本によって喚起された映像のようなものが分厚い層をなしていたりする。ストーリーを進める原動力はイメージの連鎖だが、そのイメージを追ってもう一度、書庫に入り本棚を見渡すと、決して体系立った整理などしていないのに、それらしき本にあたる。手に取れば記憶にあるページや記述のあった場所に何となく行き着く。読んだときには、格別感銘も受けず、なるほどと膝を打ったわけでもないのに。単に記憶のどこかにしまいこまれていたものだ。

う。それだけではない。年若い目に小さな活字は過酷だ。もともと強度近視なので、ごく緩い度数の読書用眼鏡を作ったが、それでも小一時間で目の奥が締め付けられるように痛み出す。そうした紙媒体の欠点を電子書籍が容易く解決してくれる。読書用端末を入手したこともあり、目は格段に楽になった。採光の良い場所でも快適な読書ができ、持ち歩きに適し、もちろん本棚を壊され空間を占領されることもない。

ところがどうやっても資料本には使えないのだ。しおりや検索や付箋や様々な機能が付いているというのに、蛍光ペンや大小色とりどりの紙付箋、書き込みを駆使した導入部から起承転結を追って読み終わる、小説のような「線の読書」はともかくとして、構造を「面なし」は立体的読書」となると、電子書籍は甚だ使い勝手が悪い。

論旨のまとまりを捉えるのに、たとえば提示された事例が、本の厚みなどのあたりのページ、どのあたりの面に位置しているか、といった空間的な記憶が、理解することに関係しているようなのだ。理解や思考のための脳内の3次元地図と紙媒体の特定の活字の位置が緩く、しかしかなり確信的に結びついている気がするのだが。

内容の空間的把握はそのまま、救いがたく乱雑で本棚を壊して書籍が溢れている書庫にも持ち込まれ、四半世紀も昔に読んだ本を動物的な勘で探し出すことを可能にしている。

起きた本のホロコーストを扱ったF・P・エス著書「物の破壊の世界史」では、その最終章で、読み取り用電子機器やインターネットが使えなくなったから、図書館サイトがサイバー攻撃を受けたら、ハードディスクの不具合が生じたら、として、没収の必要も焚書の労もななく、書物が一挙に破壊される悪夢について触れている。考えてみれば、焚書なら1人の蒐集家が命がけて隠して、一部でも破壊を免れる可能性があるが、電子空間から大量の書籍が跡形もなく消えるのは、すごく簡単だ。物霊に呪縛された旧世代としては甚だ心許なく、そんな悲劇が起こらないことを祈るばかりだ。

令和の時代にあってアイデアの出所も取材もネット、というのは、大いなる誤解で、テレビや新聞でさえなく、情報が古びているとはいえず、おそろしく吟味され、検証され、秩序立てられた内容が、記憶に残りやすく理解しやすいという理由だろう。

おそろしく吟味され、検証され、秩序立てられた内容が、記憶に残りやすく理解しやすいという理由だろう。

おそろしく吟味され、検証され、秩序立てられた内容が、記憶に残りやすく理解しやすいという理由だろう。

おそろしく吟味され、検証され、秩序立てられた内容が、記憶に残りやすく理解しやすいという理由だろう。

おそろしく吟味され、検証され、秩序立てられた内容が、記憶に残りやすく理解しやすいという理由だろう。

おそろしく吟味され、検証され、秩序立てられた内容が、記憶に残りやすく理解しやすいという理由だろう。